

# 義務教育学校講演会 講演概要

日時：平成 29 年 5 月 14 日 午後 2 時～午後 4 時

場所：王寺町文化福祉センター 大ホール

## 第 2 部 パネルディスカッション

「これからの義務教育について」

パネリスト 小柳和喜雄氏 奈良教育大学教職員大学院教授  
泉谷章仁氏 大阪府堺市教育委員会事務局学校教育課指導課長  
谷田眞知子氏 大阪府池田市ほそごう学園副学園長  
平井康之 王寺町長  
まとめ 梶田叡一氏 プール学院大学学監 兼 学校法人桃山学院教育顧問  
王寺町義務教育学校設置検討懇話会座長

(小柳氏) 皆さん、こんにちは。第 1 部で梶田先生に講演をいただき、義務教育をどう考えるのかという事について、そのきっかけとなるお話をいただきました。先生からお話ありがとうございましたように、子どもたちの体の成長が大きく早まってきたことが一つ。二つ目は、子どもたちがいろいろと考えたりするという認知発達そのものについても、以前に比べるとかなり早くなってきたということ。三つ目は判断力、道徳力に関してもかなり早期化されてきたということです。このことは 1971 年頃から言われ、子どもたちの発達そのものに関わってきている。戦後 6・3 が始まった頃はその 6・3 制がいい形で折り合っていた。しかし 71 年の頃にはどうも実態に合わないことが言われはじめた。しかしそのまま進んできたのではないかという話がありました。加えて、中 1 問題ということにも先生は触れられました。実際に中学校に上がるときに不登校や様々な問題があり、そういった様々なことが起こるのは、子どもの実態と今の学校の制度そのものについて、何か不都合なものがあるのかもしれない。考えていく必要があるのではないかということ、これまでの歩み、梶田先生が見てこられたこと、考えてこられたことを通して講演でお話をいただきました。また、モデルにしてきたアメリカの教育そのものも、「6・3 制」という枠についてはほとんどなくなっており、義務教育全体の大きな枠組みは残しているかもしれませんが、その中の組み方については多様性があるというお話でした。

そう考えますと、ここにきて子どもたちの実態にあった教育そのものについて、実態に合っていないと不都合が生じてくる。それにいつ対応するかが問われているのではないかということもご講演いただきました。

そういったご講演を受けながらこの後のパネルディスカッションでは、これからの義務教育について、これを考えていくということで設定されています。先ほどご紹介がされましたように、これから堺市様の取組、池田市様の取組について伺いながら、そして平井町長様から王寺町が今後どう考えていくのかについてもお話いただきな

がら進めて行きたいと思います。そして最後に梶田先生から、全体を通してこれが大事ではないかなどについてコメントいただけたらと思います。

それでは、最初に堺市の取組についてお話しいただきます。堺市教育委員会では、実際に小中一貫教育をこれまで推進されているわけですが、それに舵を切った、力を入れられたその背景にあるものや意図は何だったのかということについてお話しください。

(泉谷氏) みなさん、こんにちは。堺市教育委員会の泉谷です。この度はお招きいただきましてありがとうございます。

本市の小中一貫教育は、「つながり」がキーワードになると思います。

まず本市の紹介をしながら進めます。ご存じかと思いますが、本市は大阪府の南部、大和川の下流にあります人口84万人の政令指定都市です。子どもの数は小学校中学校を合わせて68000人。小学校93校、中学校が43校あります。本市は平成18年に政令指定都市になったわけですが、その前後から堺市教育活性化プランを策定し、様々な施策を進めて参りました。そうした中で様々な課題が明らかになってきました。先ほどの梶田先生のお話にもありましたが、特に小学校5年から中学校1年というその思春期の入り口辺りで、中学校入学後の学習の決まりであったりとか、教科学習の指導のやり方であったりとか、あるいは生徒指導の体制の違いによって、中学校での不登校や問題行動が増えておりました。

そこで、これらを何とかしなければいけない、少なくしなければならない。そこには小中学校間の段差を低くして、接続を円滑にする必要があるのではないかと考えました。平成23年2月に「未来をつくる堺教育プラン」を策定し、その中で縦に繋がる教育の推進として、9年の一貫した育ちと学びの連続性を重視した教育の推進を進めました。併せて平成元年から小中の連携を本市では進めておりましたので、より一層の人の交流を進めるために、平成20年に中学校の先生が小学校で授業をして、かつ小中連携の取組のコーディネートをする小中一貫教育推進リーダーを、堺市単費で中学校10校に配置しました。その後段階的にその配置を増やし、平成24年度に43の全ての中学校区に配置いたしました。

その推進リーダーの役割は、その先生が担当している教科を、主にその校区の小学校の5、6年生に対して授業を行います。その教科は英語が多く、約半数以上を占めております。外国語活動の授業を学級担任とティームティーチングで授業をします。その他、体育や算数などの教科もやっております。さらに推進リーダーの先生は自分のもっている授業以外の授業にも入り込んだり、いろんな生徒指導の対応、応援もしたりしております。この効果ですが、推進リーダー教員は、授業で教えたりしながら子どもたちとの様々な関わりを通して、中学校へ入ってくる子どもたちの実態を肌で感じるようになりました。そして何か支障があったなら、一緒に関わっている小学校の学級担任の先生から、これまでの具体的な対応や情報を確認することができました。さらに、その対応や情報を推進リーダーは、自分の中学校の先生に情報提供しており

ます。また子どもからしますと、例えば推進リーダー教員に英語を教えてもらっていると、また中学校でも教えてもらえる、会えるということで、非常に親しみを持って中学入学当初から入ることができるということで、安心感があるいは親しみが生まれてくる状況があります。

子どもと繋がっているだけではなく、先生方同士も繋がりが深くなりました。いろいろなところで研修をしたりする中で、お互いが親しみ、あるいは安心感が醸成され、その結果子どもたちの中学校入学後の生活が安定したものになっています。また自尊感情の醸成であったり規範意識の小中間の段差の解消であったり、児童生徒の不登校、問題行動の減少にも繋がっております。その他、授業規律、学校生活の一貫性など、中学校区で語られているところです。以上です。

(小柳氏) ありがとうございます。少し伺いたいのですが、5年生頃からの時期を大切にしなければならないということで舵を切られたようですが、義務教育で言いますと、6・3だったものがどんな中身の区切り方になって課題解決に向かったのでしょうか。

(泉谷氏) 数え方としては、最初の4年間、中期の3年間、後期の2年間と、4・3・2の考え方が全市で基本になっています。

(小柳氏) 堺市様では、5年生からの子どもの様々な変化が以前より早く起こっていることに対して、そこをしっかりとやっていくことが中学校の生活に影響する。だから5年生くらいの学年から中学校の先生も関わって、子どもたちの成長をみんなで把握しながら導いていかれるということをお願いされ、義務教育を6・3の枠だけではなく、より柔軟に考えようという形で舵を切ったという認識でよろしいでしょうか。ありがとうございました。

続きまして、池田市様の小中一貫校である「ほそごう学園」に副学園長としてご勤務されている谷田先生からは、池田市が小中一貫校に実際に入られたことについて、先生がどのようにご理解されその意図をどう感じられているのか。そして実際に「ほそごう学園」でどう進められているのかについてお話しください。

(谷田氏) こんにちは。ほそごう学園の谷田です。

まず池田市の小中一貫教育について、少しお話ししたいと思います。池田市は、中学校は5校です。2007年度、平成19年度から小中一貫教育についての調査や研究が始まりました。ほそごう学園の前身は、細河中学校、細河小学校、伏尾台小学校の1中2小です。30年ぐらい前から3校で主として人権教育、同和教育の共同研究を推進していったこともあり、池田市では一番最初の2008年度、平成20年度にモデル指定を受けました。それから小中一貫教育の研究を始め、他の中学校区でも段階的に指定を受けて、全市5中学校区で本格的に小中一貫教育がスタートしたのは、

2014年、平成26年度です。翌年、ほそごう学園が開校しました。ですから、ほそごう学園以外の他の学校は、分離連携型の小中一貫校となります。池田市は小中一貫教育の研究を始めた頃から、細河小学校、細河中学校、伏尾台小学校は施設一体型の小中一貫校になると言われてました。

当時は、私は別の中学校区にある小学校で教諭として勤務をしていました。池田市の学校ではもっとも遅い小中一貫教育の研究が始まった学校でした。児童生徒数が非常に多い3小1中の校区で、一体型は絶対になり得ない学園でした。教職員が集まるだけでも体育館が必要でしたので絶対無理だなと言っただけでしたが、それでも小中一貫教育の必要性は感じていました。小学校文化と中学校文化の違いから来る中1ギャップ、卒業前の子もたちの不安と期待が入り交じった様子や中学校入学後に上手くなじめずに苦しむ卒業生の様子。それは新しい環境へ飛び込んでいくわけですから当然のことなのですが、中にはそんなに悩まなくてもいいのにというくらい必要以上に悩む子もおり、すごく苦しそうで、少しでも不安が解消できたらというのは、卒業生を送る立場で思っていました。

先ほどの梶田先生の講演でもありましたが、思春期が早くなっているということは言われていて、学級担任がほとんどの教科の授業を行っている小学校のスタイルでは、どうしてもしんどくなってくる子が出てきます。高学年では、もっと複数の人が関われる、中学校でやっているような教科担任制に近い形が必要じゃないかなということは、その当時から感じていました。そのような一般的な理由に加えて、ほそごう学園にはもう一つ切実な理由がありました。児童生徒数の減少です。細河小学校区は田園地帯や農村で、田や畑が多いところです。伏尾台小学校は、企業が開発した何十年も前のニュータウンです。6学年とも一クラスしかない状態が、両校とも続いていました。小さな固定した集団で育つことのメリットとデメリットを比べると、やはりデメリットの方が多いのではないかと思いました。実際、ほそごう学園が開校してから子どもたちにアンケートを採りますと、小中一貫校になってよかったことに対して「友だちが増えた」「2クラスになった」「クラス替えがある」といた回答が多く、クラスが増えたことを喜んでいました。また小中一貫教育ということに関しては、特に小学校高学年からは、「中学生の生活が見られる」「部活の様子が分かる」ととても好評でした。「中学校のテストの大切さが分かった」という意見もありました。また中学生からは、「弟や妹と一緒に登校できる」「小学生と話すことが多くなった」、それから駄目なんですけど「忘れ物を借りることができる」、また「心が広がるように感じる」という声もありました。

開校してから感じたことですが、私たち教職員の意識に対する効果も大きかったと思います。私はずっと小学校籍だったので小学校教員の目線になってしまうのですが、高校入試のことやそれに向けての学習、評価のこと、また中学1年生から2年生、3年生と成長していく、激変といってもいいくらいの子もたちの様子の変化など、これまで遠くからでしか見えなかったことを目の当たりにする機会に恵まれたということは、とても大きな事です。中学校籍の先生方も小学校1年生の子もたちの様子

を見て「可愛いなあ、あのおっさんみたいな9年生もこんなんやったんやなあ」と言われていたりして、9年間の子どもの育ちを見ることの大切さを実感することができました。これも教育委員会が意図されていたことだったのかなと思っています。以上です。

(小柳氏) ありがとうございます。小学校と中学校の子どもたちが同じ敷地に暮らしている中で、当初思っていたような不安も若干あったのですが、小学生中学生ともに子どもたちはそれほど不安を感じてなくて、かえってそこで感じられた新たなことについてのお話がありました。

先生方がごらんになられて、同じグラウンドを使うにしても中学校の子がクラブをやっていたりとか、様々な施設で小学校の子が遊べないのではないかとか、小学校の子が中学校の子を見ると引くのではないかとか、そういう不安もひよっとしたらお家の方々が持たれたのではないかと思うのですが、その辺りは実際どうなのですか。

(谷田氏) 開校前には「中学生が走り回っていて、小さな中学生にぶつかったら小学生は大怪我をするんじゃないか」とか、「中学生が小学生をいじめたらどうするか」ということを言われたのですが、実際開校してみると、走り回っているのは小学生です。中学生はむしろ遠慮しています。ほそごう学園は、元々中学校だったところを改修・増築している学校で、休み時間に遊びやすい場所、舗装されて上靴で遊んでもよい場所など、中学生が自分たちの場所だと思っていたところに小学生がどっと来るので、可愛そうに中学生は4階の渡り廊下辺りに固まっていたりして、中学生がむしろ遠慮している姿が非常に見られます。別に心配したほどのことは何もないという感じです。

(小柳氏) 小学校の子が騒いで、中学生の勉強を邪魔にするようなことはありませんか。

(谷田氏) そういう事はありませんが乗り越える工夫をしています。また後ほど話そうと思っています。

(小柳氏) ありがとうございます。では平井町長にお伺いしたいのですが、町内にある3小学校と2中学校の5校を2つの義務教育学校に再編するという基本方針を策定されておられます。小中学校を整備されるのではなく義務教育学校を選択されていることについて、なぜなのかをお話しいただけますでしょうか。

(平井町長) なぜ義務教育学校なのか。一貫校という選択も当然あるわけですが、端的に言いますと、去年一昨年、町の教育ビジョンを作るときに、そういったことの基礎調査を、皆さん方ともご意見を戦わせてやらさせていただきました。そ

のような流れの中で、昨年度から国の制度として学校教育法が改正されて、義務教育学校制度というものが制定されたということ。当然いろいろな議論はあったと思いますが、国の制度としてそれが法律改正に及ぶということは、やはり1000以上の学校とか特区も含めて、いろんな実例の積み重ねがあって、その中でメリットもデメリットも当然のことながら説明されているわけですね。その中で接続期の成長であるとか中1プロブレムの不登校の問題であるとか、課題的なものをどういうふうに解決するかという一つの処方箋として、義務教育学校制度というものを理解したわけです。

王寺の場合には、大きないじめ、数多い不登校の事例といったことは、それほど私の耳に届いてくることはありませんでした。ただし、いろいろな検討、研究をする中で、PTAの代表の皆さんからは、「大小はあるかもしれないけれども、いじめとかは当然ありますよ」という話も当然聞かせていただきました。そういう状況の中で、今後学校制度を活用しながら見直していくのにどうするかということがありました。

もう一つ王寺の場合には一番大きな実情、特徴として、王寺小学校という一番伝統のある小学校があるわけです。私もその卒業生で、明治7年にできた学校です。この王寺小学校の施設の改築等々はあったわけですが、かなり古く、一番古い校舎で築58年です。私が小学校2年生のときに、そういえば建てたかなという校舎もそのまま使っているという実態があります。それと王寺中学校もまた古い中学校で、築50年以上の校舎があります。これらの校舎の老朽化の中で、震災対策のための耐震工事を7～8年前に行ったわけですが、肝心の現在のいろいろな教育ニーズ、一つはIT化でありますとか空調設備やトイレでありますとか、そういったものに対応できていないなどの問題があります。そういった電気とか設備とかいろいろなものを試算しますと、学校単位でこれを改築すると相当なお金がかかります。

いろいろ話が前後しますが、王寺小学校は、片岡王寺という飛鳥時代のお寺の埋蔵文化財の包蔵地の上に建っているわけです。昭和30年代になぜその地に学校が建てられたかは過去のことでわかりませんが、学校の整備を急がれたと思います。そういう文化財の包蔵地の上に王寺小学校は建てられておりますので、きちっと遺跡調査をする必要があるし、調査に最低10年はかかるといった事情もあります。また王寺町は狭いので、仮設でどこかに移転しながらということもなかなか難しいのです。そのような物理的な事情もあり、このようなことを総合的に勘案する中で、今の王寺中学校の敷地に、両学校とも改築の必要があるので、それだったら義務教育学校という新たな制度を持ち込んで、それを基本に据えて制度の仕組みといいますか施設の利用の方針を決めていったということです。

余談になるかもしれませんが、教育ビジョンを作る中で、王寺の教育の方針をどうしようかとなったとき、やはり充実した国際人を育成しようじゃないかということを中心に掲げていました。その中でやはり英会話であるとか英語教育をできるだけ早い時期から系統的に学べるような取組がいいんじゃないか。あるいは、王寺も聖徳太子のゆかりの地でありますから、1400年の歴史なり亀の瀬といった文明の要路といったところでもあったりと歴史文化に本当に恵まれた所ですので、そういった

地域の歴史、文化、その誇りを子どもたちにできるだけ早く教え身につけてほしい、積極的に自慢するくらいになってほしいなと思っています。ということは「ふるさと科」とか独自の教育課程の展開、あるいはこの時代、人工知能とかプログラミング教育やキャリア教育等を考えたとき、独自性のある教育課程、カリキュラムを組める、そういう仕組みに挑戦する値打ちがあるなど、こういった全体の判断の中で義務教育学校制度を今選択したということです。

(小柳氏) ありがとうございます。今、なぜ義務教育学校かということについてピュアに教えていただいたかと思っております。

では、これから堺市様の取組と池田市様の取組についてもう少しお伺いします。実際に堺市の方ではこの数年実践されてきて、どのような成果や課題が出てきているか教えてください。

(泉谷氏) 先ほど言いましたように自尊感情の醸成であるとか規範意識の乱れの解消であったり、あるいは不登校の問題の減少ということが数値的にはのぼってきているわけではあります。これらは授業に中学校の先生が小学校にいらっているというだけではなく、推進委員会で小中合同の研修であったり、小中が相互に授業参観を行う、あるいは様々な分析を一緒に行うといったことをしてきたわけです。一部その後に懇親会なども行ったりもしましたが。それ以外に小学校の子どもたちが中学校の体育大会を見に行く、文化祭を見に行く、そういうふうな交流をコーディネートする。あるいは小学校6年生の対抗運動会があるのですが、その指導に中学校の陸上部が指導に行くというようなことの効果が出てきておまして、そのような交流が進んだことで、学力の向上をそれぞれの小学校、中学校でやるのではなく、中学校区でやっているということになりました。例えば、授業のノートを一つとるにしても一貫性を持たせよう、あるいは家庭での学習についても一貫性を持たせよう、というような学校が増えてきております。

本市には、「さつき野学園」「大泉学園」の二つの施設一体型の小中一貫校があります。同じような制度をもちろん取るわけですが、発表の中では、郷土史について小学校1年生から中学校3年生まで授業の流れがあるわけですが、その一貫性であったり教育効果であったりとかが見られてきています。それを一人の校長先生の元で一つの教育目標で教育を行っていくというところが、大きく学校を変えていく元になっています。また、教科の進む割合であったりとか小6と中1の段差であったりとか解消されます。またほそごう学園からのお話にもありましたが、一つの学校の中で暮らしているということで、特に中学生は常に委員会活動であるとか部活動であるとか、常に小学生と接するので、常にお兄さん、お姉さんとして見られるということで、優しくなったり明るくなったりしました。これまで校内で問題行動がいろいろあったんですが、そういうことが本当に少なくなりました。小学生も、中学校の生徒や先生と接しますと、これまで中学校は怖いと思って入ってくる子が多かったのですが、大き

くなったらあんなお兄ちゃんお姉ちゃんになりたいなというあこがれをもちながら学校生活を送っていると聞いております。また、人の気持ちが分かる人になりたい、自分にはよいところがある、と答える子どもの数が増えて参りました。

ただ課題としては、9年間一貫した教育課程編成実施の充実であったりとか、小学生の家庭学習の習慣化の形成などに課題が見られます。あとは、先ほど、4・3・2制ということをお話しましたが、その区切りに応じた目標の設定が少し弱いので、そこをしっかりと定めて特色ある教育を推進させていくこと、小中学校両方の免許を持っている先生をより多く配置していくこと、そういうことが課題です。

(小柳氏) ありがとうございます。中身について細かなところまで教えていただきました。続いて、ほそごう学園ではどうであったかをお願いします。

(谷田氏) 先ほども申し上げましたように、9学年の子どもたちが混ざって一緒にいることが当たり前のようにになっていることが一番大きなことかなと思います。

体育大会も9学年一緒にしているのですが、下の学年の子どもたちは、「かっこいい」ととにかく上級生にあこがれるし、下級生が見ているので上級生が張り切ったりとか、とてもよいところが出てきていると思います。泣いている子がいたら通りかかったときに「どうしたん?」とか、怪我でもしていようものなら抱っこして保健室に連れて行ってくれたりとか、中学校の3学年だけで生活していたら絶対に見られないような中学生の姿が見られると、中学校の先生方からも評判です。

私たち教員にとって一番大きな成果は、やはり授業研究です。高校入試を視野に入れた中学校の授業の内容の多さ、それから小学校の授業の丁寧さということをよく言われるのですが、やはり小学校のどの学年の先生も中学校のどの教科の先生も、ともに授業研究をしていかなければならないということで、1年目2年目は「ユニバーサルデザイン」の視点を元にした授業づくりを研究テーマにして、分かる、見通しが持てる、学び合えるといったものを項目にあげて、「ほそごう授業スタンダード」と言う形で文章化して徹底し、学習規律についても「ほそごう授業の決まり」を共有して徹底を図っています。1年目はとにかく手探りだったのですが、2年目である昨年度は、研究授業以外に年間3回、それぞれ2週間の相互授業参観期間というのを設けました。互いの授業を、例えば「この日の3時間目にはこの授業をします、見に来てください」というのをボードに貼りだして、それを見に行く人は「見に行きます」とボードに書き、参観後はふり返しシートに感想を書いてもらいます。お互いの授業を参観する機会がすごく多くなって、私たち自身も学び合うことができ、これは絶対に子どもたちに返っていくと思っています。

あと、開校して気づいたことでとても気に入っているのが学校図書館です。3校から本を持ち寄っているので蔵書数は当然多いですけど、図書館は一つなんです。そこに小学生向けの図書と中学生向けの図書があって、例えば小学校高学年で読書の好きな子が「小学校の図書館では全然足りない、もっと大人っぽい本を読みたい」という

ときに、私たち大人でも読みたくなるような本屋大賞を取っている本とかが普通に並んでいて読めるので、それがすごく嬉しいと言っています。逆に中学生でも時々ほっこりしてごろんと寝転がって絵本を読みたいなと思ったとき、そういうコーナーがちゃんとあるので、そこに中学生がごろごろと転がって絵本を読んでいたりにして、図書館の利用者がすごく増えたと聞きます。他にも給食交流をするとか8年生が5年生6年生にスマホ等の賢い使い方の授業をする、あるいは9年生が1年生に英語を教えるなど、本当に楽しいこと、見ていて嬉しいことがたくさんあります。

課題もありまして、例えば一コマの時間は、小学校が45分、中学校は50分なので、チャイムを鳴らすことが難しいです。一応チャイムは鳴らしますが、このチャイムは授業の始まりのチャイムなのか、それとも5分前の予鈴なのかその時間によって違って、私たち大人はととてもとても対応できないのですが、子どもたちは対応しています。中学生は時計を見て動いていて、中学校の先生の中には、このチャイムになってからベル着がすごく定着していると、逆に喜んでいる人もいます。定期考査のときも、小学生が先に休み時間になってしまうと非常にうるさいというので、テストのときだけ小学生も50分授業と、テストに合わせてやっています。その期間は息を潜めるように小学生は生活していてとても可愛そうなので、代わりに「わくわくタイム」という取組をしています。テストのときは中学生が先に帰りますので、その日は掃除をなしにして、昼休みからどんと30分以上の休み時間で思いっきり遊ぼうという取組です。また、放課後部活のあるとき小学生が遊べないじゃないかという声、運動場で思いっきり遊びたいという声に応じて、今年度からはテストの一週間前の部活がないときに「放課後遊べる DAY」というのを設定して、小学生が放課後残って遊べる日を設けています。

課題のほとんどは工夫次第で乗り越えられると思っています。ただ大きな課題は、我々の意識が、やはり小学校、中学校という6・3の枠からなかなか解放されないという点です。例えばテストが小学校と中学校で違って、単元ごとの確かめという要素をもつ小学校と一定の期間学習したことがどれだけ定着しているかを図る中学校の定期テスト、問題用紙と解答用紙の別々になっているテストも、小学校ではほとんどしません。そういったところもちゃんとならしていこうと、小学校4年生から定期テストという形を採り入れていこうと言っています。また、小中一貫校では6年生のリーダー性が育たないということが話題になるのですが、別に6年生で育てなくても4年生で育てたらよい、7年生で育てたらよいと、発想を転換していくことを求められているかなと感じています。

(小柳氏) ありがとうございます。どのような形で進めて行かれたのかという話が聞かれ、また一方でそれに関わって新たなルールも作っていかなければならないということもお話しいただいたと思います。

こういった話を聞く中で、町長の今後の見通しを聞かせていただければと思います。

(平井町長) どうしても頭の中ではこうあるのかなとか、いろいろ見聞きする中で推定するわけですが、先ほどからお二人のご意見を伺ってしまして、カリキュラムのこととか子どもたちの学校生活そのものをなのですが、これは体験させていただく、あるいは実際に見させていただかないとなかなか伝わってこないのではないかと思います。もともと今年から先進事例、先進地といいますか、先輩校のいろんな実態、前例、課題も含めて、できるだけ見させていただこうと思っています。カリキュラムなり学校生活なり先生方を中心に、先生方を巻き込んでやろうと思っておりますが、やはりまずは実情を見させていただくのが一番よいのかなと改めて思いました。その節はどうかよろしくお願ひしたいと思います。

(小柳氏) どうもありがとうございました。時間が来ておりますので、今のお話を受けながら、梶田先生、今後どういうふうに王寺町が考えてやっていくべきかお話しただければと思います。

(梶田氏) 今お話を伺って、最後に平井町長がおっしゃいましたが、やはり先輩の学校の取組、情報をよく集めてきて、それを整理して、王寺町に一番合ったというものをやっていくことですね。

よく私たちは言うのですが、学力保障と成長保障の両全、つまり学校に来た子はみんなそれなりに学力をつけさせなければならぬし、人間としてしっかりさせなければならぬ。この二つをきちんとやらなければならぬ。そのために9年間の教育にということはどういう新しいことをやるのか。例えば学力保障ということ言うと、9年間の学習指導要領の中身とか教科書の中身を洗い直して新しく構成し直し、メリハリを付けなければなりません。ここはさっとやっていい、これは重点的にやる、とかがありますよね。これは9年制一貫の学校がいろんな工夫をしています。指導要領の改訂の度に中身が増えて、しんどくなっているけれど、9年間の中でメリハリをつけることによって、それがきちっと子どもの力になるようにしていかなければならない。

それから成長保障ということでは、今までどうしても同年齢層の活動が多かったのです。いわゆる学年主義というのですが。明治の初め頃は学年主義ではなくて、1年生に入ってもなかなか上に上がれない、2年生になってもなかなか3年生に上がれない、ということで、同じ学年でもいろいろな年齢層の子どもがいたのです。ところが、1年間やったら全員を次の学年に上げる、ということが明治の中期くらいから当たり前になりました。これがずっと続きましたので、下手すると同年齢層の仲間としか付き合わなくなりました。堺市の例、池田市の例がありましたが、もう一度異学年、異年齢がいろいろと一緒にやるということが大事です。昔の子どもらは地域では当たり前だったんですね。ちょっと年令が上になればリーダーシップをとれますし、上の人が多くいる場合には上の人に従って人を立てることを覚えるんです。リーダーシップ

だけでなくフォローシップも両方学べるんです。異年齢だとそういうことがやりやすいですね。

それから今までなかった学校の活動というものを、せっかく9年制にしたのだから入れてみるということもあります。いずれにしても学校の勝負は、あの学校に行かせたら子どもが上手く育った、ということです。毎日毎日満足して行かなければならないけれども、一時期よく言われました子どもたちの目がキラキラと、イキイキと、なんていうことだけではどうにもなりません。子どもにちゃんとした学力が身について、ちゃんと人間性が身についてしっかりする、という結果が出なければなりません。教育は結果主義です。この結果主義だということを、もう一度9年制に持っていくことで考えるきっかけにさせていただきたいものです。

最初に平井町長もおっしゃられたけど、いろんな先輩の学校がいろんな工夫をし、いろんな経験もしています。それを王寺町に持ち寄って、王寺町の子どもたちの質を高めていく、これがこれからの大きな課題だろうと思います。

本当にありがとうございました。

(小柳氏) どうもありがとうございました。もっともっとお話を聞きたいのですが時間が参りました。

本日、最初の講演、パネルディスカッションを通して、何が大事なのかということについて考えて参りました。子どもたちの実態に合わない教育ということではやはり問題がある。ここをどう越えていくのかということについて、さらに梶田先生から実際異年齢のことについて、話がありました。最近ご兄弟姉妹も少なくなっている家庭も多いかもしれません。そういった点を含めて子どもたちが集団の中で学ぶということの大事さや、実際に結果や成果を出している学校について、今後さらに学ばなければならないということを教えていただいた気がします。

これで終わります。本日はありがとうございました。